

# 遺伝医療化に伴う個人の「遺伝情報」の位相と 課題に対する社会学的考察

丹上 麻里江

本研究の目的は、今日とりわけ顕著な状況にあるといえる、ゲノム科学の急速な進展を背景とした個人の遺伝情報の可視化という新たな事態が人と社会にいかなる変容をもたらすか、そしてまた、それはいかに形成されてきたのか、その社会学的含意を究明することである。今世紀に入り飛躍的に社会実装の可能性を高め、実用化を進めてきた遺伝子解析技術は、ゲノム編集や DNA 鑑定など、産業上の利用や法医学などを含む社会制度上での活用といった多方面で、実質的な利用価値を高めてきた。そのなかでも、本論文では人に対する医療との関わりにおける遺伝情報の現代的諸相について追究する。

現在の遺伝医療の実践は、我々の「遺伝子」を標的にして分子レベルでそれに働きかける遺伝子治療やゲノム創薬といった、直接的な医療応用に限られない。血液等の、侵襲性が低く簡単に採取できるサンプルから解析された個別の遺伝情報を参照した診断や治療、予後予測などにも開かれている。例えば診断に関しては、遺伝情報を解析することで分子・ゲノムレベルでの個人の特性が分かり、まだ実際には発症していなかったり、さらには将来的に発症するかどうか確実とは言えないものにも範囲が拡大される。あるいは同様に、それらについて出生前の段階で知ることも可能となる。既に、これらに代表される遺伝医療の実践は我々にとって身近なものになりつつある。

ただし本論文の射程は、そういった遺伝医療を実際に受ける患者らを主な対象とするケーススタディに限定されるものではない。そうではなく例えば、直接治療等は受けなくても、疾病等に関連した遺伝学的検査を提案されること、遺伝学的な出生前診断を検討する機会をもつこと、あるいは関連する情報が社会に広がることなどによって、今日の医療と遺伝とが極めて密接なものであるという理解や認識を着実に深めている社会状況を見据えた論考である。

有史以来人類の傍にありながらも、自己の把握を巡る潜在的な他律性の問題を今改めて科学の下で前景化させている遺伝の概念を、遺伝医療化の傾向のなかで主題化することによって、近代以降の科学と社会との関係を追求する。それは、社会空間で新たな課題を浮上させ、人びとを新た

なかたちで差異化する作用をもつ今日の遺伝概念を象徴的なものとして、人の存在と本質とがビッグデータに代表される情報の基盤に帰着されうる現代社会の重要な側面を追究する本研究の視座によって設定される。本稿ではこれまでに構築されてきた、医療を対象とした社会学における医療化論・生物医療化論による問題提起と理論を参照しつつ、生命倫理学などの動向と照らし合わせながら、遺伝概念を囲む科学と社会の変容を動的に捉え、それを巡る今日的課題の諸相を描き出すことが目指される。

そのためにまず第一章では、可視化が進む個人の遺伝情報の社会的位相がいかなるものであるかを整理する。その上で、今日の課題を把握するには遺伝情報の社会的な重層性を紐解く必要があることを示す。第二章では、社会との結節を重視しながら、科学の内部での遺伝概念の変遷を捉え、近代科学としての生物学の成立の先に位置する遺伝学や生命科学の前史を本稿の課題と照らして整理し、生物学的に規定される自己がいかに作られてきたかを検討する。第三章ではそれらの検討の上で、序章で設定された問いに応答しながら、遺伝医療化を軸にした社会学的思考の可能性を示す。最後には、課題設定を含めて本稿の理論構築と論証が、遺伝に代表される科学の知と情報基盤を巡り現象する個人と社会についての今日的課題に対して、社会的かつ社会学的意義が十分に論考されているか、確認されることになる。